

「何事にも時がある」

コヘレの言葉 3:1-11

聖学院大学 キリスト教センター所長・政治経済学部チャプレン 菊地 順

今年のシリーズ説教は、「心に響く聖書の言葉」というテーマのもとで守られていますが、私は、先ほど読んでいただきましたコヘレの言葉第3章を選びました。私は、牧師の家庭に生まれ育ちましたので、聖書には小さい頃から親しんでいましたが、聖書の言葉に出会うという経験をしたのは、たぶん中学生のころではなかったかと思います。小学生のころまでは、自分の父親が牧師であるということは、あまり意識していませんでした。それを意識するようになったのは、中学に入ってからでした。その一つの理由は、その学校がカトリックの学校であったからです。その学校に入ることは、自分で決めましたが、決めるとき、そこがカトリックの学校であることは、あまり意識していませんでした。しかし、入学してから、俄然そのことを意識するようになったのです。同じキリスト教とは言え、カトリックとプロテスタントでは、雰囲気はだいぶ違っていました。加えて、毎週聖書の授業があり、その中で自分が牧師の息子であるということが無意識のうちに自覚させられていきました。そして、たぶん、それがきっかけだったと思うのですが、そのころから聖書をよく読むようになりました。

初めは、たぶん、創世記から読み始めたと思うのですが、聖書の言葉に出会ったという経験をしたのは、今日のコヘレの言葉を読んでからです。このコヘレの言葉というのは、以前の翻訳である口語訳聖書では「伝道の書」と訳されていたところで、この書き出しは、大変印象深い言葉で始まっています。それは、今、皆さんがお手許に持っている新共同訳聖書では、「なんという空しさ／なんという空しさ、すべては空しい」という言葉です。これは、口語訳聖書では、「空の空、空の空、いっさいは空である」と訳されています。私は、この口語訳聖書で育ちましたので、この「空の空、空の空、いっさいは空である」という言葉が頭にも心にも沁み込んでいます。ちなみに、昨年出版された聖書協会訳聖書というがありますが、そこでは「空の空、空の空、一切は空である」と訳されていて、元の口語訳聖書の訳に戻っています。

ところで、皆さんは、「空の空、空の空、いっさいは空である」と聞いて、どのような感じを持たれるでしょうか。おそらく、ある虚無的な響きを感じるのではないのでしょうか。それこそ、空しさといったものを感じるのではないのでしょうか。私も、そうでした。そして、それは、この後の文章を読んでいきますと、ますますその感を深めて行くのではないかと思います。そのところを、少し口語訳聖書で読んでみたいと思いますので、お聞きください。

空の空、空の空、いっさいは空である。

日の下で人が労するすべての労苦は、その身になんの益があるか。

世は去り、世はきたる。しかし地は永遠に変わらない。 (少し飛んで)

すべての事は人を生み疲れさせる、人はこれを言いつくすことができない。
目は見ることに飽きることがなく、耳は聞くことに満足することがない。
先にあったことは、また後にある、先になされた事は、また後にもなされる。
日の下には新しいものはない。
「見よ、これは新しいものだ」と言われるものがあるか、
それはわれわれの前にあった世々に、すでにあったものである。
前の者のことは覚えられない。また、きたるべき後の者のことも、
後に起る者はこれを覚えることがない。

そのように謳われています。何と厭世的で悲観的な内容ではないでしょうか。しかし、反面、これはまた事実ではないでしょうか。コヘレトは、「日の下には新しいものはない」と語ります。それは、ある面、確かなことではないでしょうか。人間の一生を見ても、人は誕生し、成長し、そしてしばしば病を得て、最後は死に赴くのではないのでしょうか。それは、すべての人に訪れる人生です。そして、その中で行うさまざまな活動も、それがたとえどんなに偉大で称賛されるものであっても、それはすでに過去の時代にもあったものではないでしょうか。日の下には新しいものは何もないというのは、確かなことなのではないでしょうか。そうだとすると、わたしたちが行う労苦というものには、何か意味があると言えるのでしょうか。過去の繰り返しであるなら、そこに何の意味があるのでしょうか。それは、ただわたしたちの疲れを増すだけの労苦であり、そこには何の益もないとも言えるのではないのでしょうか。

しかし、このコヘレトの言葉は、第3章に入ると、俄然様子が変わります。コヘレトは、次のように語り出します。「何事にも時があり／天(てん)の下の出来事にはすべて定められた時がある」。コヘレトは、「何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある」と言うのです。以前の口語訳聖書では、「天(あめ)が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」と訳されています。すべてのわざには時がある、定められた時があると言うのです。この言葉は、17節でも繰り返されていますが、そこでは「すべての出来事、すべての行為には、定められた時がある」と語られています。口語訳聖書では、より明確に、「神はすべての事と、すべてのわざに、時を定められた」と訳されています。時を定められたのは神であり、それは神によって定められた時なのです。それが、すべてが空しく過ぎ去っていくようなこの世の出来事の中に、あると言うのです。しかも、すべての事が、神によって定められた時であると言うのです。そして、それは、2節以降で、具体的に、「生まれる時、死ぬ時／植える時、飢えたものを抜く時」と語り出されています。口語訳聖書では、「生るるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くにときがあり」と謳われています。そのように、すべてのものには時があると言うのです。しかも、それは神によって定められた時であると言うのです。空しく過ぎ去っていくようなこの現実の背後に、神のみ手が添えられていると言うのです。一つひとつの出来事が神のみ手の中にあり、それによって定められて存在していると言うのです。これは、何と慰めに満ちた言葉ではないでしょうか。そこには、わたしたちの空しさを打ち破る決定的な視点があります。

もし、永遠なる神が、わたしたちの一つひとつの、一見空しいとも思える営みの背後におられるとするならば、わたしたちは、もはや現実の空しさを嘆く必要はないのではないのでしょうか。むしろ、その永

遠の神から、この一見空しいとも思える現実を捉え直し、そこに意味と希望を見いだして行くことができるのではないのでしょうか。11 節では、「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる」と記されています。口語訳聖書では、「神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた」と訳されています。この永遠なる神から見れば、すべてのものはその時に適って美しく創られているのです。そして、私たちの心に、そうした心を生み出す永遠を思う思いが、すでに与えられていると言うのです。そこに、この世の一切の空しさを打ち破る視点があると言えるのではないのでしょうか。そして、この永遠を見詰める視点こそ、この世の一切の空しさを打ち破る視点なのです。私は、この視点を知ったとき、聖書のみ言葉に出会ったという思いがしました。そして、それ以後、このコヘルトの言葉第 3 章は、私の大事な聖書の言葉になりました。

ところで、今日の聖書箇所は、アメリカの第 35 代大統領 J. F. ケネディが 1963 年 11 月 22 日にテキサス州のダラスで暗殺され、その 3 日後に、ホワイトハウスの近くにあるセント・マシューズ教会で葬儀が行われましたが、その葬儀で読まれた聖書箇所でもあります。私が中学生のころは、すでにケネディは暗殺されていましたが、マスコミなどを通して、現代を代表する英雄のように扱われていたため、私もケネディに対して特別の思い入れがありました。そのため、後に、ケネディの葬儀で、この聖書箇所が読まれたことを知ったとき、この聖書箇所はますます印象深いものとなりました。葬儀のために、この聖書箇所を選んだのは、母親のローズ・ケネディでした。ローズ・ケネディは、この聖書箇所をとて愛していたと言われていますが、ローズ・ケネディは、子供たちが栄光の座に就いた時も、そしてまた悲劇の死を迎えた時も、それを神によって定められた時として受け止め、その悲劇にもかかわらず、神への信頼において生きた人でした。

ローズ・ケネディには 9 人の子供がいましたが、4 人の息子の内 3 人を悲劇的な死において失いました。1 人(長男)は戦争で、そして 2 人(次男と三男)は暗殺という仕方で失いました。また、次女も事故で亡くなっています。そして、その長女は、精神的障害を負った人でもありました。しかし、決してこの世の空しさに飲み込まれることはありませんでした。それどころか、それに飲み込まれそうになる度ごとに、その空しさを打ち破る神のみ手を見上げたのです。そして、すべての事に時を定められる神のみ手に、一切を委ねたのです。そしてまた、そのようにして、すべての悲劇を乗り越えて行ったのです。

この世の生活は、一見すると空しさに満ちているかもしれませんが。「空の空、空の空、いっさいは空である」としか言えない現実があるかもしれません。しかし、聖書は、その背後に神のみ手があると語るのです。空しさの中に、その空しさを超えて導く神のみ手があると言うのです。それどころか、すべてのものは、神によって定められた時の中にあるのだと言うのです。そして、その神のみ手に信頼して生きなさいと言うのです。なぜなら、そこにこそ、唯一、この世の空しさを打ち破り、それを乗り越えて行く道があるからなのです。

今日は、皆さんに、是非そのことをお伝えしたいと思ひまして、今日の聖書箇所を選びました。「神はすべての事と、すべてのわざに、時を定められた」、そのことを、今日は是非覚えていただければと思います。

2019 年 10 月 8 日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「心に響く聖書の言葉」